

《第 457 回 (2018 年 11 月 7 日) 子どもの本の読書会記録》 参加者：8 人 文書参加：1 人

時間：10:00~11:30 場所：オーテピア 4 階ホール

『ライオン 1 頭』 ケイティ・コットン／文 スティーブン・ウォルトン／絵 木坂涼, 岩城義人／訳 BL 出版

高さ 35 センチという大判サイズの表紙には、こちらを見つめるライオンの顔。その瞳は一直線に読者の方を見つめていて、何かを訴えかけているようにも感じます。

今月の課題本『ライオン 1 頭』では、絶滅が危惧されている 10 種類の動物の姿 (ライオン・ゴリラ・キリン・トラ・ゾウ・エチオピアオオカミ・ペンギン・ウミガメ・コンゴウインコ・シマウマ) が、優しく語りかけるような詩とともに紹介されています。

一見写真かと思間違ふほどの動物の絵は、体表の感触や温かみ、毛の流れの一本一本まで、感覚として分かるほど緻密で、迫力があります。写真ではなく、絵だからこそ切り取ることでできた動物の美しさを感じることができました。文章は、動物の野生での生活の一部分を切り取った短いものですが、どれも愛情に溢れていて、作者の動物への深い理解が窺えます。

決して「お勉強」などではなく、動物の美しい造形や尊さを、素直な気持ちで受け入れることができる絵本でした。

続いて、読書会参加者の方の感想をご紹介します。

- ・動物の数が減っているのは、自然淘汰ではなく、必ず人間が関わっている。「かわいいね」だけではなく、行動を振り返るきっかけになるといいと思う。物語の最後に出てくるライオンは、寂し気に見えて、ぐっときた。
- ・世間の意識は、教育などによって進んできている。昔は、本物の毛皮を持つことが「きちんとしている」とみなされていたが、今はフェイクファーを持つことがオシャレで進んでいるという考えもある。豊かになるために環境を破壊するのではなく、豊かになったことで周りを見ることができたり、優しくなれたらいいと思う。

・文章が読みやすい分、絵で楽しめた。絵本の読み方の基本ができたように感じる。地元で昔、そこら中にいたというカワウソも、今はいなくなっている。昔の人は、まさかなくなるなんて、と思っているのではないか。動物の絶滅は、遠くの出来事のように感じるが、実は身近で起きていること。

・動物を順番に数字で紹介しているところが好き。子どもは数を数えることが好きなので、視線を引き付けやすいと思う。動物の生活を短い言葉で切り出している文章が、味わい深く良かった。

・とにかく、写真のような絵。絵本のサイズも大きいけど、原画は一体どのくらい大ききなんだろうか気になる。人間のせいで数を減らしている動物だが、それを守るのも、人間がしなければならないこと。動物園だけではなく、広いところを歩く本物の動物の姿を見る機会が、多くの人にあってほしい。

・巻末の解説は考えさせられる。本文の寄り添うような言葉は、良く馴染む。オレンジ色の文字は、白黒で描かれた絵が映えるけど、読みにくい。小学校 4 年生に読み聞かせをした時、最後のライオンの横顔の場面で「それも絵なが？泣いてるように見える」という感想があった。

・描かれている動物たちの姿が自然。動物園の檻の中の動物を見ると複雑な気持ちになる。人間と動物が、バランスよく共存していければいいと思う。

・読んで怖くなった。絶滅を危機と覚えることは日常生活の中でほとんどなかったが、生態系の破壊・動植物の絶滅により食糧危機が起これば……。数の絵本で絶滅危惧種をテーマにしたものは珍しいが、数があることで、少なさを想像する助けになっていた。

次回 12月13日(木) 10:00~11:30
オーテピア 4 階集会所 □ 『レモンの図書室』